

明治20年代、樋口一葉が貧困に喘ぎながら一心不乱に筆を走らせていた頃。幕末に中国から日本に伝わった月琴という楽器は最盛期を迎えていました。繊細な感性で人々の心情を鮮やかに描き出す一葉の作品に、月琴のひそやかな音色が寄り添います。月琴の調べと朗読が織りなす一葉の世界を、どうぞお楽しみ下さい。

作品のあらすじ

## ○琴の音

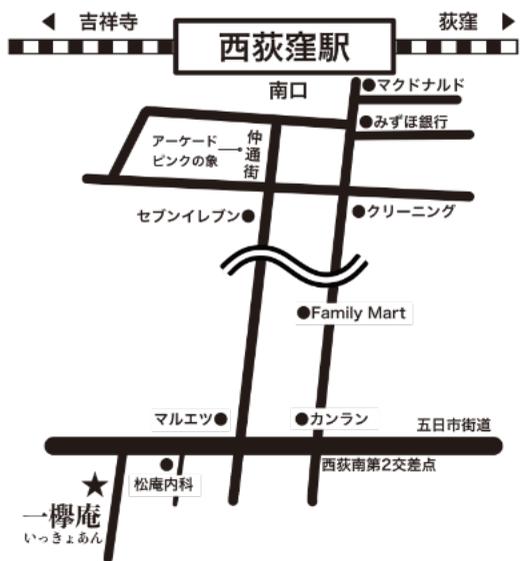
渡辺金吾は十四歳。父に愛想をつかした母は金吾が四歳のときに二人を残して家を出る。自暴自棄になった父は酒に溺れ金吾が十歳のときに死んでしまう。天涯孤独の身となった金吾は母を恨み、心を固く閉ざして食うや食わずの生活を続けていた。ある秋の夜、徘徊していた金吾の耳に聞こえてきたのは、十九歳の森江静が奏でる琴の音の、天上の楽のような響きであった。

## ○軒もる月

袖は、遅くまで働く夫の帰宅を待っている。破れ窓から向かいの軒に上る月を見あげて思うのは、かつて使用人として仕えていた桜町家の殿のことであった。結婚後も殿からは何通もの手紙が届いているが、開封せず仕舞ったまま。夫と殿との狭間で思い悩んだ袖は、軒端から漏れる月のひかりの中で、手紙を開封して読み始める。読み終えた時、袖の心に舞い降りた境地とは。

## ○十三夜

貧しい士族の娘お関は裕福な官吏の原田勇と結婚したが、夫の冷酷な仕打ちに耐えかねて実家に帰る。両親に離縁を願うが、父はお関に因果を説きさとし、彼女は運命を受け入れて夫の家に戻る。そこで乗った人力車の車夫は幼なじみの高坂録之助であり、彼もまた苦しい過去を抱えていることがわかる。十三夜の月が照らす中、それぞれの憂いを胸に、二人は別々の方向へと帰って行く。



Google Map



登録有形文化財

**一樗庵** いっきょあん

〒167-0054 東京都杉並区松庵 2-8-22

- ・JR中央線（各停）総武線「西荻窪」駅南口より徒歩10分
- ・関東バス 「松庵二丁目」バス停より徒歩4分



朗読 唐 ひづる から ひづる

【へっぽこロードッカー】を標榜。山羊座B型、青森県むつ市出身。東京女子大学短期大学部卒。演劇、長唄、津軽民謡を齎る程度に勉強。『現代ロードク』を芯に、自分ありのままの表現で、聴いて下さる方と作品世界を共有したい、一緒にご飯を食べるみたいに、この場をともに味わいたいと願っている。ちなみに、どんな美麗な文章も（下手をすると英語でも）ズーズー弁で朗読できる。音楽とのセッション朗読が好む。朗読ユニット・カタルージュメンバー。たまにYouTubeをアップしているので、よかつたらお聴きくださいませ。



朗読 古澤 寿実 ふるさわ じゅみ

「朗読ことほぎ」主宰。派手な演出や技巧に頼らない、言葉そのものが持つ力を素直に引き出す朗読を目指している。朗読公演のほか、演奏会や地域イベントでの声の担当としても活動。日本朗読協会会員。日本語しこば協会会員。東京都認定朗読奉仕員指導者。朗読ユニット・カタルージュメンバー。第10回古典の日朗読コンテスト大賞、第30回国民文化祭朗読コンテスト民話朗読部門準大賞、第22回国際芸術連盟朗読オーディション最優秀新人賞、日本朗読検定協会第5回青空文庫朗読コンテスト第3位、川端康成朗読のこころを詠むいばらき朗読コンクール優秀賞ほか入賞多数。



月琴 永田 斉子 ながた せいし

「ルミエールプロジェ」主宰。故郷・長崎で伝承される月琴音楽に関する論文で国際基督教大学を卒業。資料と伝承研究を基に、失われつつある幕末～明治・大正時代の月琴音楽の響きを現代に蘇らせる試みを続けている。長崎県主催『旅する長崎学』『龍馬が生きた時代』、高知県立坂本龍馬記念館主催『女性が紡ぐ龍馬さん』など数多くのイベントに出演。CD「月琴 MOON LUTE～お龍が奏でた楽器、龍馬が聴いた音楽」をリリース。朗読と月琴による朗読音楽会「月琴で綴る龍馬の手紙」「赤いうそくと人魚」を全国にて連続公演中。西洋の古楽器リユートの奏者でもある。



2024

5/25 [土] 開演 ①11時 ②15時

同内容の2回公演・開場は各20分前

ご予約メールフォーム

3,000円（前売・当日共）

ご予約・お問合せ

roudoku.kotohogi@gmail.com

090-5810-0391(古澤)

